

# 平野大差

—美方郡温泉町所在宝篋印塔の発掘調査—

1987. 1

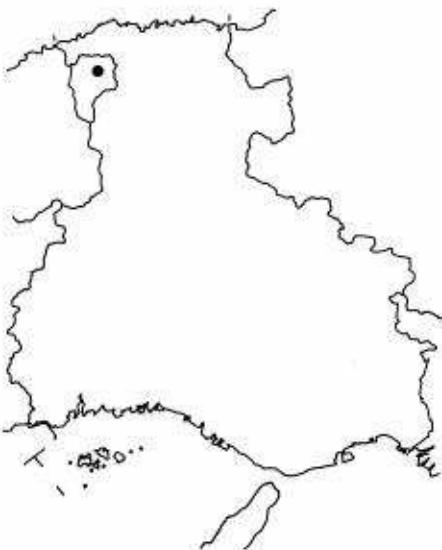
兵庫県教育委員会

平野大墓正誤表

| 頁  | 行        | 誤             | 正                     |
|----|----------|---------------|-----------------------|
| 6  | 右4.5     | …実測 解体を行った。   | …実測 <u>と</u> 解体を行った。  |
| 15 | 右29      | …3は外面に…       | … <u>4</u> は外面に…      |
| 15 | 右32      | …4は厚手の…       | … <u>3</u> は厚手の…      |
| 16 | 左9       | …築…           | …石築                   |
| 17 | 右19      | …5遺跡…         | … <u>6</u> 遺跡…        |
| 17 | 右37      | 豊田豊邦…         | 前田豊邦…                 |
| 18 | 右10と11の間 |               | <u>平野大墓の時期</u>        |
| 19 | 右36      | 多子から平野大墓を望む   | <u>平野大墓</u> から多子を望む   |
| 20 | 左14・15   | …五輪塔赤星 (1967) | …五輪塔 <u>赤星</u> (1967) |
| 20 | 左19      | …川勝 (19 )     | …川勝 (19 <u>70</u> )   |
| 20 | 右9       | 19 年          | <u>1970</u> 年         |

## 目 次

|               |    |
|---------------|----|
| I.はじめに        | 1  |
| II.調査の記録      | 3  |
| III.温泉町内の宝篋印塔 | 14 |
| IV.周辺の歴史的環境   | 15 |
| V.まとめ         | 18 |



## 例 言

1. 本書は、美方郡温泉町多子字池ヶ谷1254番地に所在する平野大墓の発掘調査報告書である。
2. 遺跡名については、従来遺跡の所在地が温泉町桐岡字平野と思われていたため、平野大墓と通称されてきたものである。今回、遺跡名は通称に従った。
3. 発掘調査は、県道丸味温泉線の改良工事に伴い、兵庫県浜坂土木事務所の委託を受けて、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課が実施した。
4. 発掘調査は、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課の市橋重喜・中川涉が担当し、昭和61年7月7日～7月25日まで15日間行った。
5. 本書に使用した図の実測・製図は、調査員と大下明・細川美千子・平井美鈴が行った。
6. 本書に使用した写真的撮影は、復原後の宝篋印塔については森昭氏に依頼し、その他は調査員が行った。
7. 本書の執筆は、I・II-1～3・IIIを市橋、II-4を中川、II-5を細川、IVを大下が行い、Vについては市橋と中川が行った。
8. 本書の編集は、市橋・中川が行った。

表紙題字は山本勝正温泉町教育長にいただいた。

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経過

平野大墓は、周囲に石積みを巡らした方形基壇の上に、宝篋印塔を立てたものであり、旧但馬国と因幡国の国境に近く、古来山陰道の要衝であった温泉町湯から南へ谷沿いに約3km上流の照来盆地に位置する。

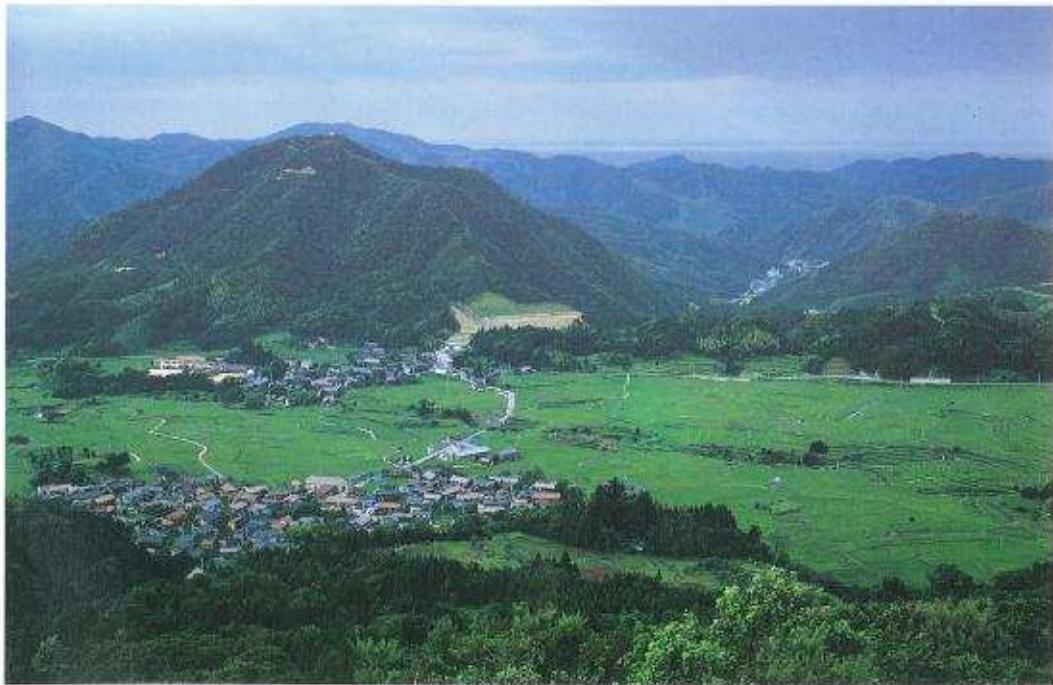
平野大墓の存在は、古く大正4年に発行の『美方郡誌』によって既に知られるところであり、文化庁が昭和57年に編集した『全国遺跡地図 28 兵庫県』にも記載されている周知の遺跡である。

今回、兵庫県浜坂土木事務所によって県道丸味温泉線の改良工事が行われることとなり、平野大墓が工事予定地内にあたるため、事前調査として兵庫県教育委員会が発掘調査を実施した。

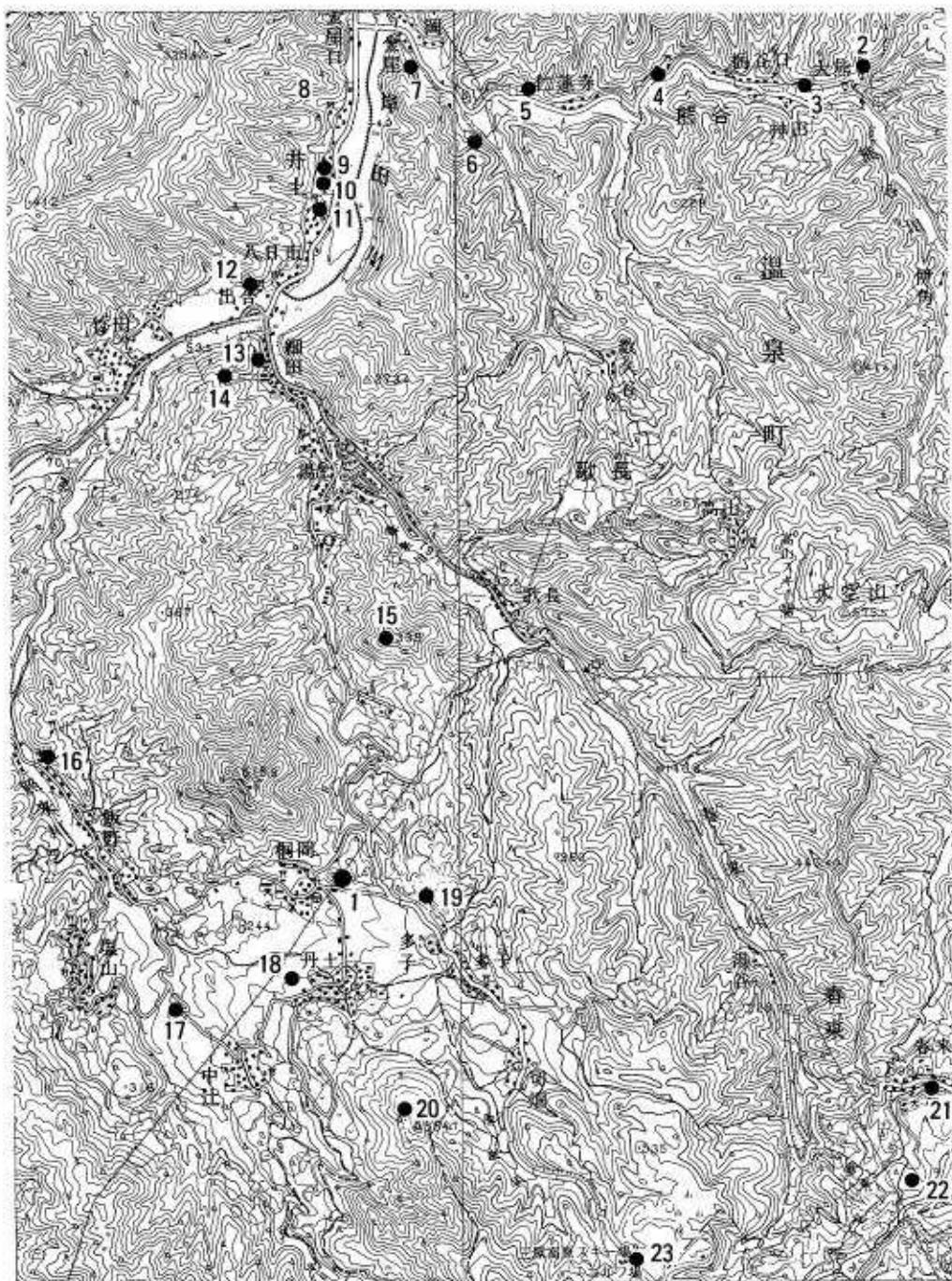
## 2. 平野大墓の立地

照来盆地は、東西約3.5km、南北約1.8km、標高約200~300mの、東西に細長い小盆地である。平野大墓は、盆地の北縁ほぼ中央部に位置し、南東に張り出した小尾根南側中腹の平坦部に築造されている。平坦部は、北側を小さな谷で限られ、南側は急斜面となって山裾へと至り、東西長約50m、南北長約20mの広さを持つ。平野大墓は平坦部の南縁近くにあって、基底面の標高約300m、山裾の水田面との比高差約20mを測る。

平野大墓の上に立ち照来盆地を望むと、非常に眺望が良く、盆地の大部分を視野に收めることができる。また平野大墓の裾を縫い北側の谷を抜けて湯村へ至る里道は、以前には利用度の高い道であった。



平野大墓遠景（南方の照来スキー場から）



- |              |             |               |               |
|--------------|-------------|---------------|---------------|
| 1. 平野大墓      | 7. 金屋たたら跡   | 13. 細田古墳      | 19. 多子城跡      |
| 2. 熊谷善住寺宝篋印塔 | 8. 黒坂城跡     | 14. 竹田向山遺跡    | 20. 丹土城跡      |
| 3. 月山古墳      | 9. 井土庵寺     | 15. 白毫山城跡     | 21. 春来萬福寺宝篋印塔 |
| 4. 熊谷辻堂古墳    | 10. 井土城坂遺跡  | 16. 飯野巖山寺宝篋印塔 | 22. 春来山田遺跡    |
| 5. 阿原古墳      | 11. 井土城坂城跡  | 17. 中辻宝篋印塔    | 23. 切畑三原遺跡    |
| 6. 敷久谷口遺跡    | 12. 面治駅家推定地 | 18. 丹土宝篋印塔    |               |

第1図 平野大墓の位置と周辺遺跡分布図 (国土地理院発行 5万分の1「浜坂」「香住」)

## II. 調査の記録

### 1. 調査前の原状

平野大墓は、発掘前には民間の管理下に置かれていた。基壇周囲には雑木が生い繁っていたが、基壇上には、宝篋印塔の笠と相輪が墓石として立てられ、その東側に塔身と基礎の破片が供物台に利用されていた。基壇は石積み上部が露出していたが、下部の石は崩土下に埋まり、積石もかなり崩壊している様子が窺えた。特に南西部の崩壊が著しく、その部分は基壇上への昇降口として使われていた。



調査前の原状

### 2. 調査の方法

発掘調査は、まず基壇を中心に約78m<sup>2</sup>の範囲を対象とし、基壇上及び周囲の表土を除去することから始めた。その段階で基壇東側に南北方向の溝状の落ち込みを認めため、幅1m、長さ3mのトレンチを延長して落ち込みの東側上端を確認しようとした。

また、平野大墓の北東側の尾根上平坦部には他の関連遺構の存在が予想できたため、第1トレンチを設定した。

さらに、発掘調査の過程で基壇南東隅から東へ約5mの地点において石垣状の構築物を確認したため、第2トレンチを設けて時期、性格を明確にするよう努めた。

### 3. 周辺のトレンチ調査

#### 第1トレンチ

第1トレンチは、尾根上平坦部に北西—南東方向に設けた幅2m、長さ39mのトレンチである。約30cmの厚さをもつ表土層下は黄褐色土の基盤層となった。基盤層上面は比較的平坦であったが、何らの遺構も検出せず、また遺物もまったく出土しなかった。



第1トレンチ

#### 第2トレンチ

第2トレンチは、南北方向に設けた幅1m、長さ6mのトレンチである。表土下約50~60cmの深さで基盤層に達したが、遺物は何も出土しなかった。

石垣の裏込め土を観察したところ腐食土であることを確認した。その結果、石垣は極めて新しい時期の構築物であると判断できた。



第2トレンチ

#### 4. 平野大墓の調査

平野大墓は、石積みをもつ方形基壇と宝篋印塔から成り、この基壇を中心に南北約10m、東西約8mの調査区を設け、のちに東側へ幅1m、長さ3mの拡張を行い、計約81m<sup>2</sup>の範囲において調査を行った。

調査はまず表土の除去、宝篋印塔・石積みの清掃を行い、宝篋印塔の台石及び石積みの基底石の下端を露出させた。宝篋印塔については、原位置から動かされているのは明らかであり、また台石も自然石であることから、本来の姿とは異なっていると考えられた。そ

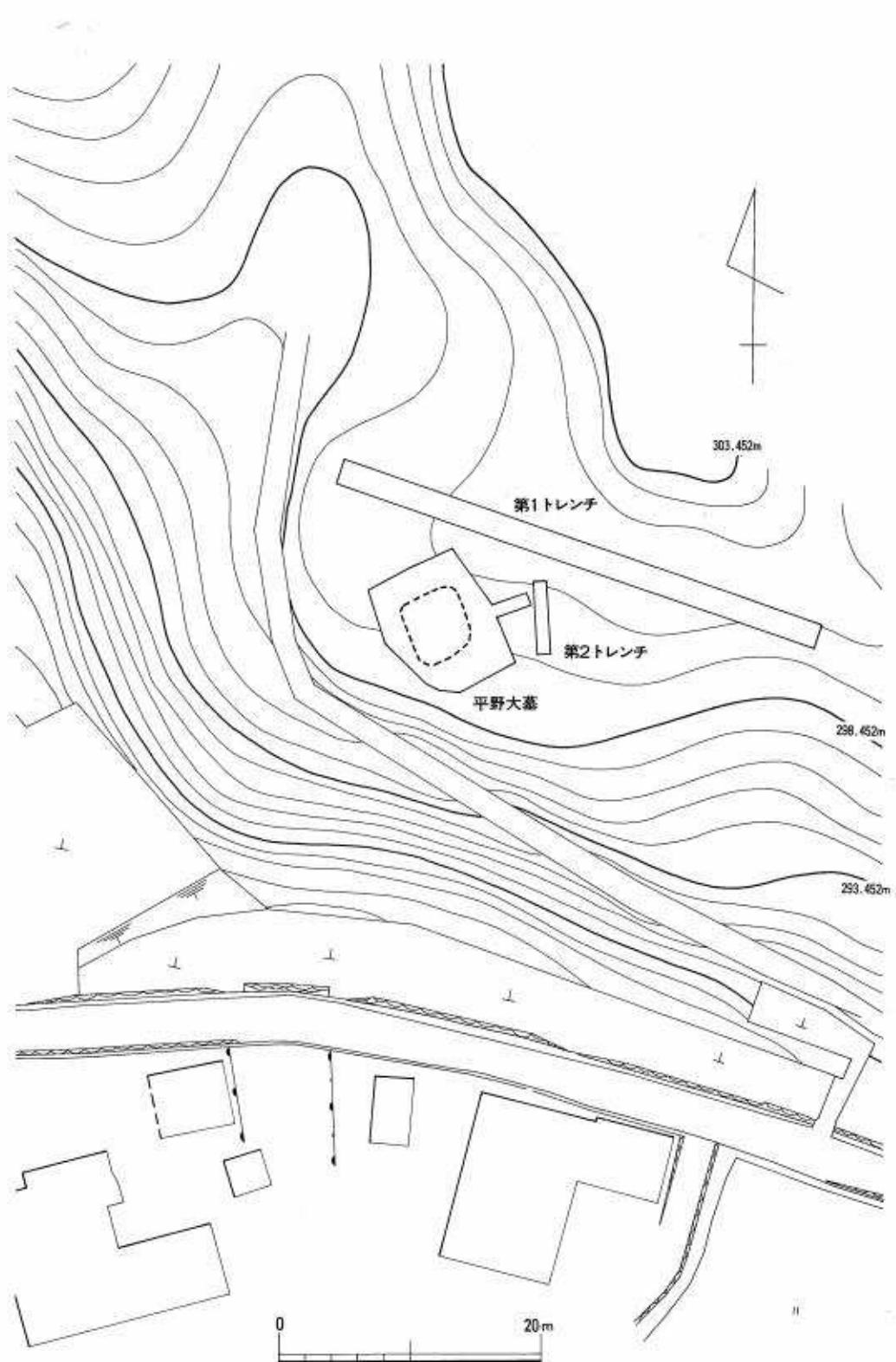
のため、次に宝篋印塔と台石及び供物台に使われていた塔身・基礎の破片を、記録したのち撤去した。

その結果、宝篋印塔から西へ約60cm隔てたところに小型の石室がみつかった。またその周辺からは、塔身・基礎の破片及び短辺が45cmを測る長方形の板石の破片が出土した。

また基壇東側では、基底石直下から溝状の落ち込みを認め、拡張した調査区で東側の上端を抑えた。落ち込みは尾根を切るように南北に延びているが、第1トレンチまでは達しておらず、北側は第1トレンチの手前で収束



上—平野大墓全景（東から）下—同断面



第2図 遺跡周辺地形図

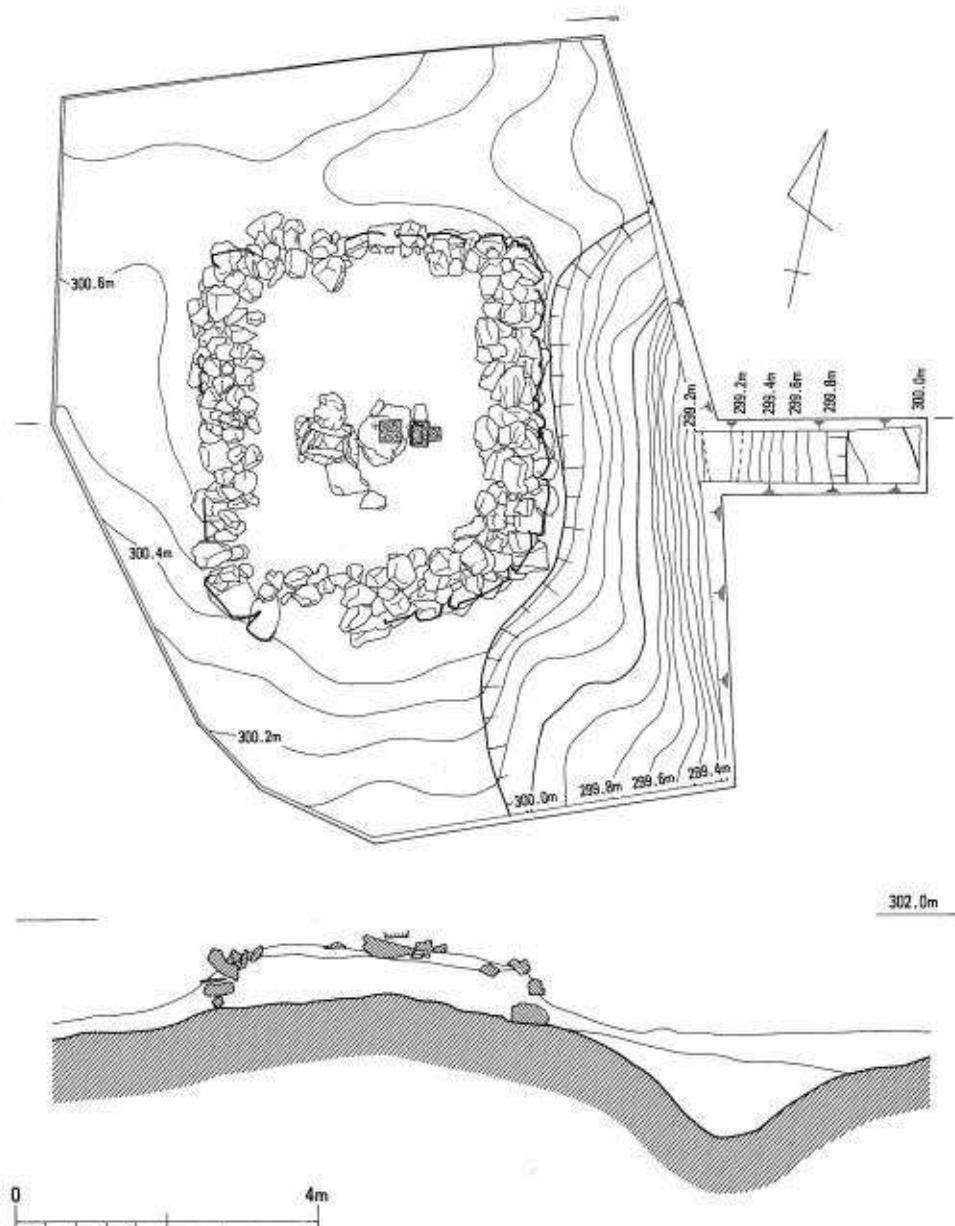
している。南側については明確でないものの、谷に向かって開放していると考えられる。断面はU字形で、幅は上面で約3.6m、底面で約0.5m、深さは西側上端から約1.5mを測る。

この落ち込みからは遺物は出土しなかったため、これが形成された時期は不明で、平野大墓に伴うものかどうかは確定できない。

基壇の調査は、石積みを実測したのち盛土の断ち割りを行い、断面の観察によって、地山整形・盛土・石積みの様子を明らかにした。

石室については、内部の精査ののち、実測解体を行った。

基壇の築造方法、石室の構造などについては、以下に詳述する。



第3図 平野大墓地形測量図

## 基壇

基壇は方形プランで、盛土と石積みから成り、盛土の周囲を囲むように、3～5段の石積みがめぐらされていた。その規模は基底部で南北約5.2m、東西約4.6m、基壇上面で南北約3.6m、東西約2.8mを測る。盛土の最高点と南側基底面との比高差は約1.1mを測る。

基壇の土層断面は1～57層（第4図）に分けたが、大きくみるとI～IV層の四段階にまとめることができる。I層は現在の表土である。II層は石積みの裏込め土と、基壇上面を覆う粘質土からなる。III層は褐色味を帯び、地山の土をブロック状に含む。IV層は黄褐色を呈し、粘質の強い土である。この土層観察の結果、基壇の築造は、地山整形→盛土（IV・III層）→石積み（II層）の順に追うことができた。

**地山整形** 先にも述べたように、平野大墓は南東に伸びる尾根の南斜面中腹から張り出した平坦部の南端近くに築かれていた。平坦部の北側はなだらかに尾根とつながり、南・西側は崖となって落ちる地形であった。

基壇の築造にあたっては、まず基壇の位置、基底石のラインを決定し、周辺の地山を削り取ることによって、相対的に中心部を高めるという作業を行ったと考えられる。特に南・北側でその痕跡が著しく、明瞭な段を作り出していた。また北裾部に認められる浅い窪みも、この作業による可能性がある。これと対照的に東・西側では、明瞭な段をもたず、なだらかな起伏となっていた。

**盛土** 盛土は大きくIV・III・II層の三段階に分けることができる。第一段階（IV層）は地山整形と同時に行われたもので、削り取った周辺の土をそのまま中心部に盛り上げる作業を行っていた。そのためIV層の土は地山に

よく似たものが多い。

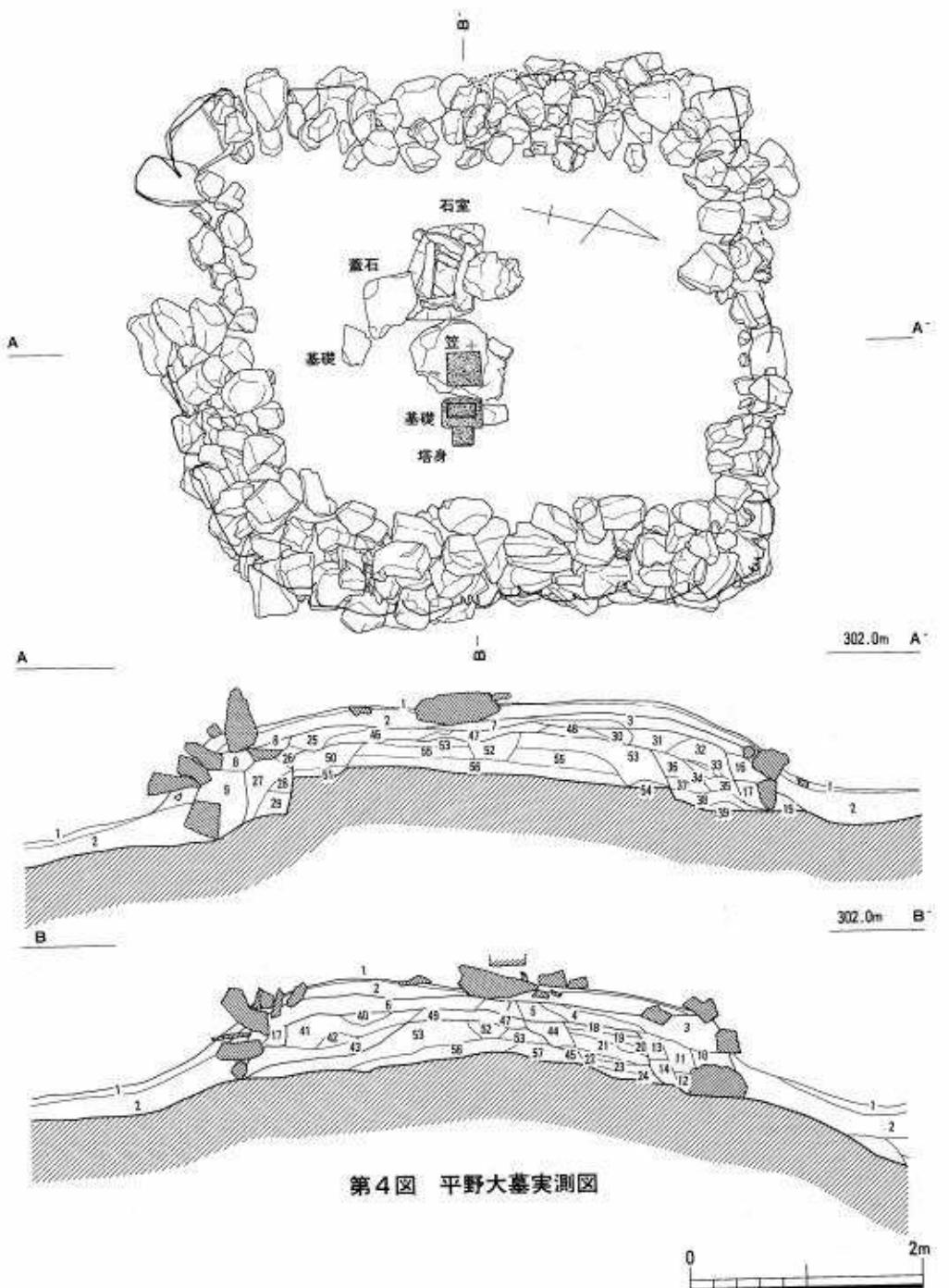
第二段階（III層）では、地山から削り取った土と周辺の表土を、互層にするかあるいは両者を混ぜて盛り上げ、基壇としての大まかな形を整えていた。

第三段階（II層）では、盛土の下端のやや外側に、3～5段の石積みを、1段積むごとに裏込め土（3・8～12・16・17層）を入れる方法で築いていた。裏込め土には表土によく似たしまりの悪い土を入れており、排水に対する配慮がなされていたものと考えられる。石積みを築いたあとには、比較的よくしまった土（4～7層）を盛り上げていた。

**石積み** 基壇を囲む石積みは、盛土の法面に3～5段の高さに積み上げられていた。石の積み方は粗雑で、乱積みした石の隙間に小さな破片を詰めて固定しただけのもので、南西隅では上部が大幅に崩壊していた。しかし南東隅から東面にかけては、比較的良好な状態を保っていた。基底石は原位置を保っていたものが多く、その並び方から、石の前面を揃えようとしていた意識が窺える。

石材は安山岩質で、付近で産出する石を使っていたと考えられ、現在でも周辺で、同質の石を用いた石垣を見かけることができる。1つの石の大きさは長さ20cm程度のものから、大きいもので長さ60cmを超えるものまであるが、だいたい長さ30cm前後のものが標準であった。石に特別な加工は見られず、手頃な大きさに割った石をそのまま使っていた。

以上、基壇については盛土の流出があまり見られず、石積みの崩壊も一部を除くとそれ程進行しておらず、概ね良好な残存状態を示していた。



第4図 平野大墓実測図

|             |            |            |            |              |            |
|-------------|------------|------------|------------|--------------|------------|
| 第I層 (1・2)   | 10. 暗茶褐色土  | 20. 暗灰茶褐色土 | 31. 濁黃茶褐色土 | 42. 明黃褐色土    | 52. 硫      |
| 1. 表土       | 11. 暗茶褐色土  | 21. 濁灰茶褐色土 | 32. 黄褐色土   | 43. 明黄褐色土    | 53. 明黄褐色土  |
| 2. 暗灰褐色土    | 12. 明茶褐色土  | 22. 濁灰褐色土  | 33. 濁黄灰色土  | 44. 明黄褐色土    | 54. 濁黄灰色土  |
| 第II層 (3~17) | 13. 灰茶褐色土  | 23. 濁灰茶褐色土 | 34. 黄褐色土   | 45. 黄褐色土     | 55. 淡黄紅色土  |
| 3. 淡茶褐色土    | 14. 淡灰茶褐色土 | 24. 濁黄褐色土  | 35. 灰褐色土   | 46. 黄茶褐色土    | 56. 淡白黃色土  |
| 4. 濁黄褐色土    | 15. 濁黄褐色土  | 25. 濁灰褐色土  | 36. 灰褐色土   | 47. 濁黄褐色土    | 57. 濁黄灰褐色土 |
| 5. 濁灰茶褐色土   | 16. 淡茶褐色土  | 26. 暗灰褐色土  | 37. 暗灰褐色土  | 48. 濁灰褐色土    |            |
| 6. 灰褐色土     | 17. 淡灰茶褐色土 | 27. 明茶褐色土  | 38. 濁灰褐色土  | 49. 明黄褐色土    |            |
| 7. 黄褐色土     | 18. 濁灰茶褐色土 | 28. 暗紫褐色土  | 39. 濁暗灰褐色土 | 第IV層 (50~57) |            |
| 8. 暗褐色土     | 19. 濁黄褐色土  | 29. 濁暗紫褐色土 | 40. 濁黄褐色土  | 50. 黄褐色土     |            |
| 9. 暗褐色土     |            | 30. 黄褐色土   | 41. 黄褐色土   | 51. 濁暗灰褐色土   |            |

## 石室

基壇の中央からやや西寄りに小型の石室が作られていた。石室は表土を除去した段階ですぐに検出でき、石室材の上半部が露出した状態であった。

掘り方は、盛土上面から掘り込まれており、長軸を東西方向に向かた不整長方形を呈している。掘り方の規模は長軸約84cm、短軸約60cm、検出面からの深さは底面中央で約15cmを測る。但し底面は平坦ではなく、底面の周囲に沿って側石・小口石を安定させるための溝状の掘り込みがみられた。しかし西小口部にだけは溝状掘り込みは認められなかった。溝状掘り込みは南側石部で最も深く、約10cmを測る。

石室は6枚の板石を組み合わせて作られた。まず底面中央に、長さ約40cm、幅約20cm、厚さ6~10cmの板石を置き、底石としていた。側石は底石の外側に立てられ、北側石は長さが上辺で25~32cm、下辺で50~69cm、高さ約29cm、厚さ12~17cmを測る。南側石は下端が尖った五角形の石で、上辺の長さ46~50cm、最大高42cm、厚さ7~17cmを測る。小口石も底石の外側に立てられ、北側石に対しては内接し、南側石に対しては側石の先端に接して立てられている。西小口石は長さ約37cm、高さ約32cm、厚さ8~10cm、東小口石は



石室検出状況



石室（東から）

長さ約31cm、高さ約32cm、厚さ7~10cmを測る。

さらにこれら5枚の石で作られた石室の内側の西寄りに、仕切り石を小口石と平行に立てて、西小口側に小副室を設けている。仕切り石の長さは上辺で約23cm、下辺で約13cm、高さ約22cm、厚さ3~7cmを測る。

この仕切り石によって区切られた石室の主室の内法は、長さが北辺部の上辺で約23cm、下辺で約29cm、南辺部の上辺で約34cm、下辺で約38cm、南北の幅は上辺で約19cm、下辺で約21cm、深さは22~24cmを測り、南側が若干広くなっていた。また小副室の内法は、上下辺とも東西約5cm、南北約24cmを測る。

この他にも、西小口外側と東南隅外側の掘り方内に、幅20~30cm、長さ15~30cm、厚さ5~10cm程度の石3個がはめ込まれてあった。おそらく、石室材の補強として裏込めに入れられた石であろう。

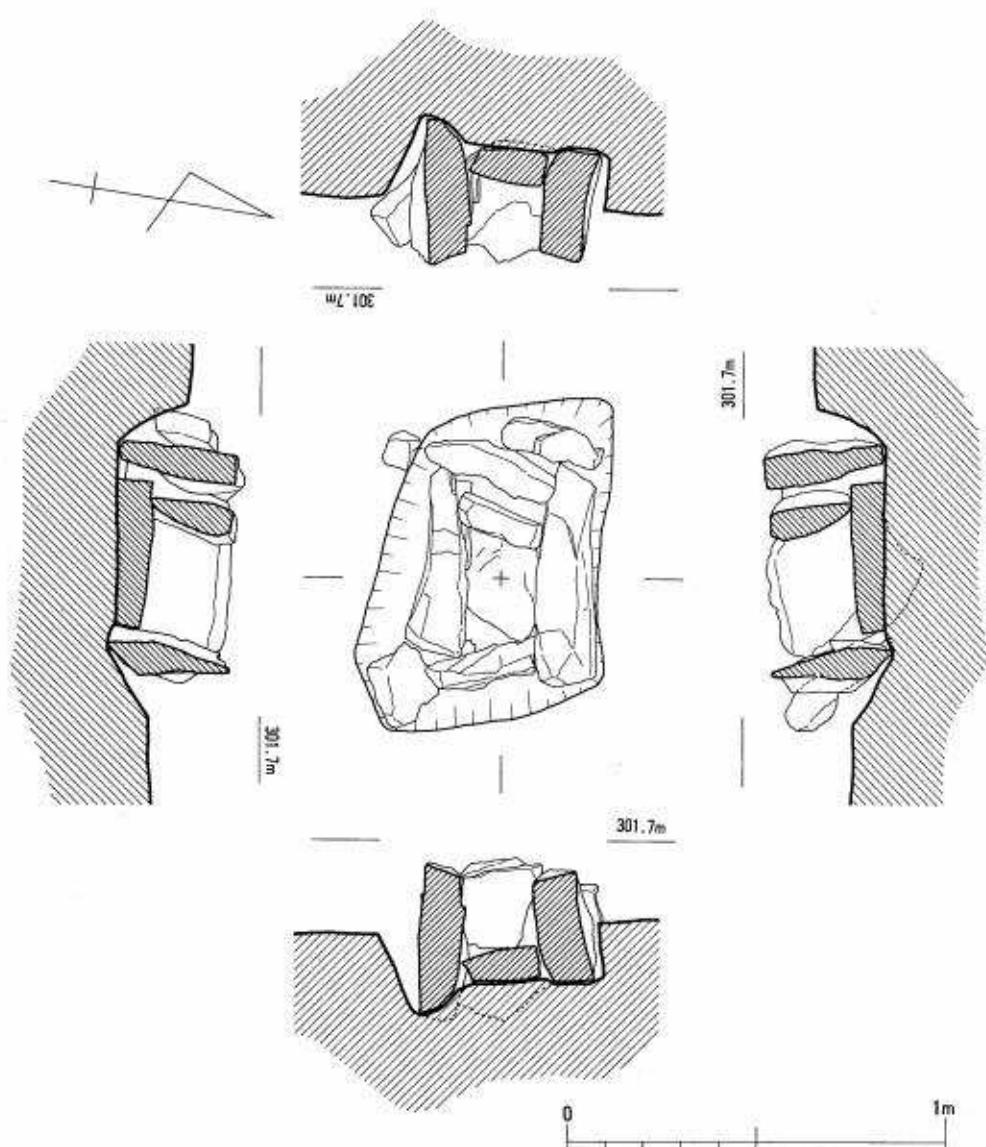
石室の石材はチャート質で、石積みと異なる材質を用いているところは興味深い。石材

は板状に割ったまま用いられており、特別な加工は施されていない。

側石、小口石の上端の高さは全体的にはそろっており、このことから、上には本米蓋が載っていたものと推察できる。しかし調査時に蓋は既に無く、この石室はかなり以前から開口していたものと考えられる。ただ、表土を剥いだ段階で、かなり大きな板石が、

石室の掘り方に一部重なった状態で出土していた。この石は元来長方形であり、現在一部欠損していて長辺の長さは不明であるが、短辺の長さ約45cm、厚さは約7cmを測り、これが蓋石であった可能性は充分考えられる。

石室の中には腐葉土が充満しており、遺物は全く出土しなかった。



第5図 石室実測図

## 5. 宝篋印塔

宝篋印塔は、凝灰岩を石材としている。相輪・笠・塔身・基礎の各部分は、欠損、磨滅が著しいが、復原すると残存総高117.7cmを測り、全容がほぼ窺える。

### 相輪

相輪は、宝珠・九輪上請花・九輪上部一輪を欠くが、九輪のうち八輪・伏鉢上請花・伏鉢・伏鉢下面中央の突起が残る。伏鉢は、肩部に張りのある円形無地のものである。伏鉢上請花は、単弁八葉で各弁の弧線に輪郭をとる。突起を除く相輪の残存高は32.3cm、相輪の最大径は伏鉢中央部にもち15.1cmを測る。突起は、截頭円錐形で先端部をわずかに欠損し、残存高5.5cm、基部径7.8cmである。

### 笠

笠は、軒・軒下段級二級・軒上段級六級・四隅の隅飾りが破損せずに残る。隅飾りは二弧を描くもので、軒から約93~98度外傾する。隅飾り外面には、底辺を除く外縁に輪郭を作るのみで、種子や蓮華文は見られない。笠の総高30.9cm、隅飾り高14.2cm、隅飾り底辺長10.8~11.3cm、各隅飾りの頂点間の長さ29.2cmである。

また、笠の上面及び下面の中央には、相輪及び塔身の突起と組み合う円孔を穿つ。上部孔の深さ6.8cm、最大径8.8cm、下部孔の深さ6.0cm、最大径8.4cmを測る。

### 塔身

残存する6片の破片から、一辺17.5~17.7cmのほぼ立方体をなし、上面及び下面に突起を持つ塔身が復原できる。塔身四面には月輪が薬研彫りで刻まれ、そのうち三面の月輪中に、バイ(薬師如来)・バク(觀音如来)・キリーグ(阿弥陀如来)の梵字が薬研彫りで彫り込まれる。残る一面は残存状態が悪く、梵字

の種類は不明である。しかし他の3文字との組み合わせから、塔身四面には顯教四仏を刻んだものと推定でき、この梵字はユ(弥勒菩薩)と考えられる。<sup>註1</sup>

塔身上面及び下面の突起は、截頭円錐形をなす。上部突起は先端部をわずかに欠損し、残存高4.0cm、最大径8.1cm、下部突起は先端部と基部を欠損し、残存高4.8cm、最大径7.2cmである。<sup>註2</sup>

### 基礎

基礎は2個の破片が残存する。1片は格狭間二面・素面一面・底面、他片は格狭間一面・素面一面・段級二級を残す。この2片から、四面のうち三面に格狭間をとって一面を素面とし、二級の段級をもつ基礎が復原できる。一面のみ素面のためこの面が裏面と考えられ、段級を含めた基礎の総高は31.5cmを測る。

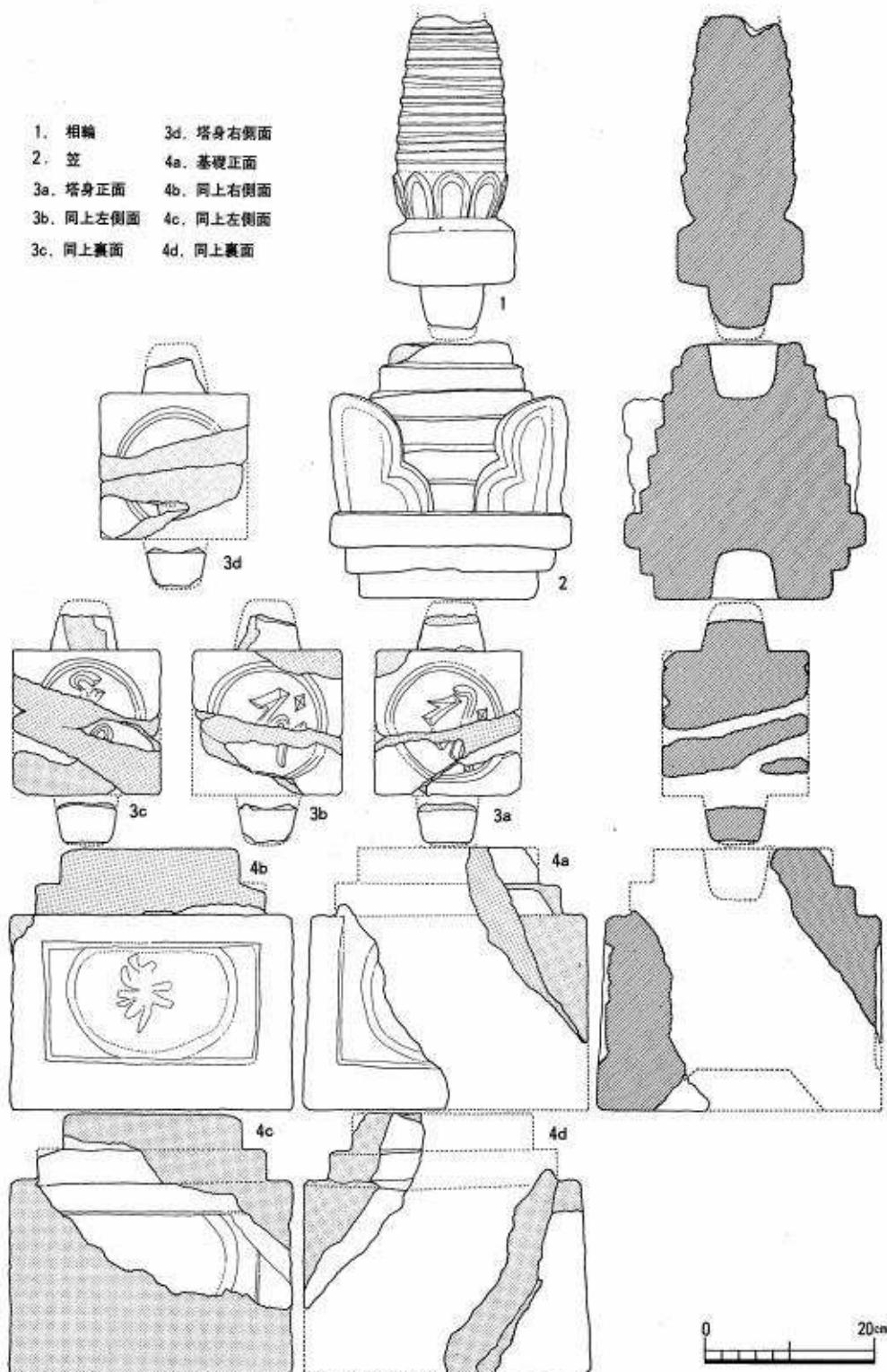
最も良好に残っている右側面は、縦23.6cm、横34cmの長方形で、縦14.7cm、横26.0cm、深さ0.8~1.0cmに平坦に彫り窪めた輪郭をとる。格狭間は、この輪郭内に薬研彫りで刻まれ、長径20.3cm、短径13.3cmの楕円形を呈する。格狭間内には、蓮華文あるいは梵字とも考えられる陰刻が浅く残るが明らかでない。

残存する基礎の各面には、銘文等は見られない。また、基礎の上面には等身突起を挿入する孔が存在したものと考えられる。

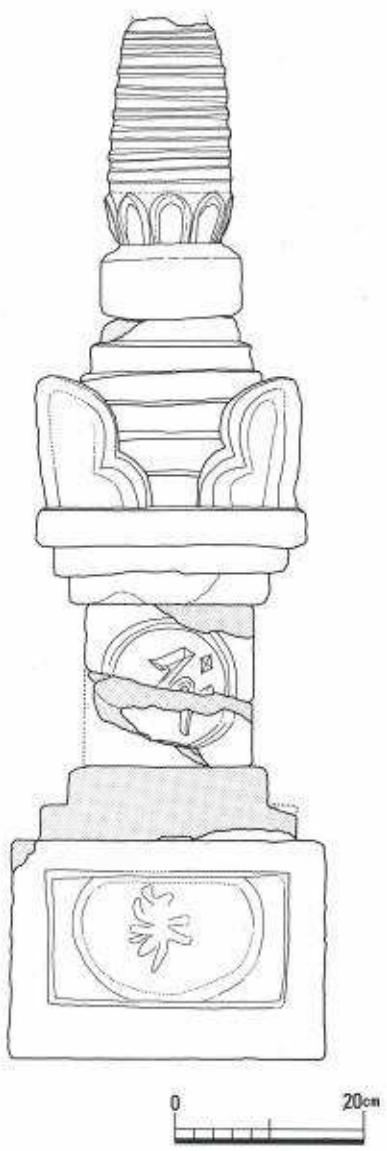
註1. ユ(弥勒菩薩)に代えて、サ(觀音菩薩)とする岡山県久米郡所在の咲薬師堂塔などの例もある。川勝政太郎「宝篋印塔」『新版石造美術』誠文堂新光社 1981年

註2. 塔身の方向については、東の薬師如来、南の觀音如来、西の阿弥陀如来、北の弥勒菩薩を相応して配置する場合や、西の阿弥陀如来を正面として配置する場合などがある。

『密教大辞典』法藏館 1931年



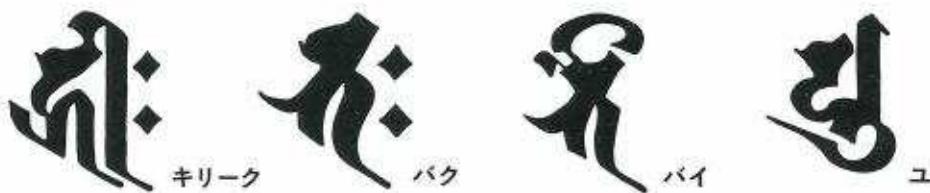
第6図 宝篋印塔実測図



第7図 宝篋印塔復原図



復原宝篋印塔



第8図 塔身種子復原概念図

### III. 温泉町内の宝篋印塔

温泉町内には、平野大墓以外にも数基の宝篋印塔が存在する。温泉町町史編纂委員である西澤昌一氏の御厚意によって案内していただいたので、そのうち4基をここで簡単に紹介しておきたい。

町内の宝篋印塔で、鎌倉時代や南北朝時代に遡る例は現在のところ知られていない。ここに挙げた4基は、残存高87~103cmを測る小形の塔で、いずれも銘文等がなく造立年代が明らかでないが、室町時代後半以降の所産と考えて差し支えないものである。

熊谷善住寺塔は、相輪先端部を欠き、残存高104cmを測る。基礎は3面に輪郭をとって格狭間を刻み、残る1面は素面のまま残す。規模・形態とも平野大墓塔に極めて類似する。

中辻塔は、道路工事の際数m原位置を動かされているが、非常に眺望良好な場所に立つ。相輪を欠き、代わりに五輪塔の天輪を載せている。基礎四面の輪郭は線刻のみで表現する。

丹土塔は、中辻塔と同様好所に立地する。相輪先端の宝珠を欠き、残存高96cmを測る。

春来萬福寺塔は、笠の隅飾りの外傾度の強い例品である。一边約2.2m、高さ約0.7mの方形石積基壇を築いた上に宝篋印塔を立ており、平野大墓との類似性が注目される。



春来萬福寺塔



熊谷善住寺塔



中辻塔



丹土塔

## IV. 周辺の歴史的環境

### —特に縄文文化について—

#### 1. はじめに

前章まで、平野大墓と温泉町内の宝鏡印塔について述べてきた。町内には、これらを含めて現在約20数個所の遺跡が知られている。しかしそのほとんどは、遺物の表面採集のみによって発見されたものであり、遺跡の内容が明確に把握できた例は極めて少ない。

その中では縄文時代遺跡が比較的豊富な内容を有している。町内の縄文時代遺跡としては、切畠三原遺跡、越坂陣ヶ岸遺跡、春来山田遺跡、春来B遺跡、鐘尾古道谷遺跡、竹田向山遺跡の6遺跡が知られている。採集遺物の一部は、温泉町民センターに展示されており、今回、温泉町教育委員会のご厚意により、展示遺物を実測する機会に恵まれた。

ここでは、まず弥生時代以降の遺跡について簡単に触れた後、同センター展示遺物の紹介を中心に、町内縄文時代遺跡と遺物が、但馬地方の縄文文化の中でもつ意義について考えてみたい。

なお、縄文時代遺跡の内容に関しては、石野博信編著『縄文時代の兵庫』(1979)を多く参考にした。

#### 2. 弥生時代以降の遺跡

縄文時代の遺跡は、後述するように高原地帯に分布している。しかし弥生時代になると数久谷口遺跡や井土・城坂遺跡のように、岸田川やその支流の熊谷川等の河川流域に立地するようになる。この傾向は古墳時代以降になんても変わらない。前・中期古墳は確認されていないが、熊谷川流域を中心に後期の小古墳が散在している。

奈良・平安時代の遺跡としては、井土廃寺と面治駅家跡推定地が注目される。井土廃寺は水田中に塔心礎を残し、布目瓦や須恵器片等が出土している。面治駅家跡は、遺跡の内容は全く不明であるが、式内社の面沼神社の鎮座地が温泉町竹田字米持であり、「メジ」という訓みの一致から付近に駅館跡の存在が推定されている(藤岡1978)。

また中世の城館として、春来城、温泉城、多子城、丹土城等が存在するが、実体はよくわかっていない(兵庫県教育委員会1985)。

#### 3. 縄文時代遺跡の概要

##### 切畠三原遺跡

本遺跡は、町内南東部の、北西に向かってゆるやかに広がる三原高原のほぼ中央、標高550m付近に位置する。

遺跡の発見は、高原を縦断する道路工事が行われた際に、兵庫県埋蔵文化財パトロール員で日高町在住の和田長治氏によって、縄文土器片等が採集されたことによる。その後、温泉町文化財審議委員の方々によっても遺物の採集が行われ、現在約200点の土器片や石器が町史編纂室等に保管されている。

図示したうち、第9図1・2は外面に楕円押型文を施す高山式土器である。3は外面に2列の押し引き刺突を施し、胎土には繊維を少量含んでおり、早期末葉のものと考えられる。4は厚手の口縁部の破片で、外面には粗い撚糸文を施しており、早期後半と思われる。5・6は共に後期後半のもので、6は2条の沈線間に細かい縄文が認められ、元住吉山式

と思われる。

本遺跡採集の土器片には、中期のものも含まれており、本遺跡が早期中葉から後期後半まで、断続的ながらも、非常に長期間にわたって営まれたことが知られる。

石器は、第10図に5点図示した。1～3は安山岩製の石鎌である。4は槍先形尖頭器で上半部約2分の1を欠失しており、復原長は5～6cmを測る。5は小型の石鎌である。4・5は共に黒曜石を素材としているが、これらはその特徴から島根県隠岐産出のものと思われる。採集された石器類の石材には、安山岩・黒曜石・チャート等多様なものが認められる。

本遺跡は、後述する遺跡に比べて豊富な内容を有しており、町内縄文時代遺跡の代表的な集落の1つとして捉えられる。

#### 越坂陣ヶ岸遺跡

本遺跡は、鳥取県との県境のすぐ西側、国道9号線の蒲生峠の南で、牛ヶ峰山から北西

に向かって樹枝状にのびる舌状の支尾根上、標高470m付近に位置する。

遺跡の発見は、1965（昭和40）年、浜坂町在住の株本貢氏による。

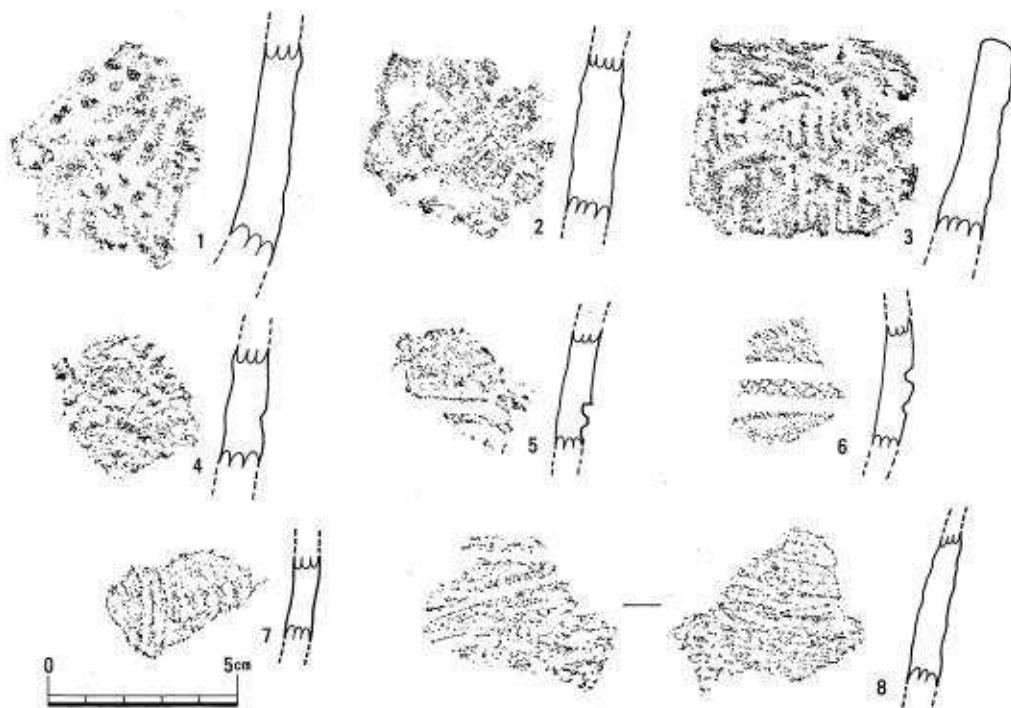
採集遺物のうち、6点の土器片が『縄文時代の兵庫』に紹介されている。このうち、3点は厚手で大型の楕円押型文を施す高山寺式土器である。ゆるやかな山形押型文と小型の楕円押型文を施す小片各1点は、前3点よりもやや古い様相を示すと思われる。また、石器としては黒曜石製の石鎌や頁岩製の剝片などが採集されたという。

本遺跡は、早期中葉のはば单一時期に残されたものと考えられよう。

#### 春来山田遺跡

本遺跡は、村岡町との町境に近い国道9号線の春来峠の南側に位置し、標高約400mを測る。遺跡発見の経緯は明らかでない。

第9図7は外面に整った縄文が施され、8



第9図 切畑三原遺跡・春来山田遺跡出土縄文土器実測図

は内外面とも条痕によって調整されている。7は前期中葉、8は前期前葉に属すると思われ、本遺跡は主に前期前半に営まれたものと言える。

#### 春来B遺跡

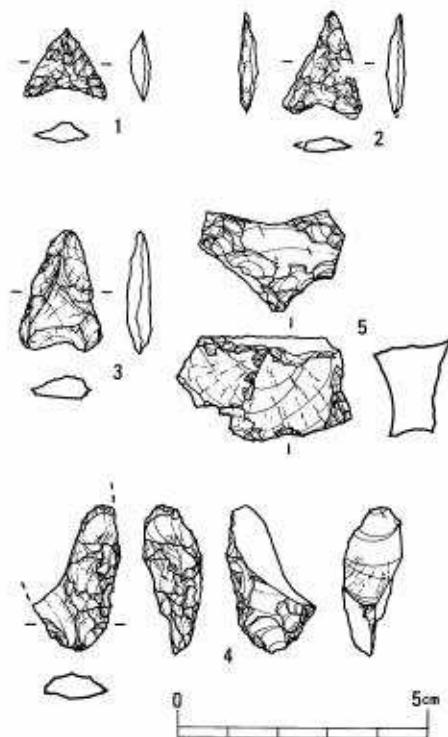
春来山田遺跡の東約1kmの舌状の尾根上、標高480m付近に位置する。春来山田遺跡、村岡町側の粗岡遺跡と共に遺跡群を形成している。越坂陣ヶ岸遺跡と同じく、1965(昭和40)年に株本氏の踏査により発見された。

採集土器には、山形押型文と楕円押型文を同一個体に施すものと、山形押型文を縦位に施すものがあるという。町内の遺跡の中では最古に位置づけられる。

#### 鐘尾古道谷遺跡

湯の集落から東へ約4km、鐘尾集落西側の山間で、乳棒状石斧が1点採集されている。

#### 竹田向山遺跡



第10図 切畠三原遺跡出土石器実測図

竹田集落の東、北東にのびる尾根鞍部の標高160m付近に位置し、分銅形打製石斧と思われる石器が1点採集されたという。

#### 3.まとめ

但馬地方の縄文時代遺跡は、標高約300～800mの高原地帯に多く分布する。これらの遺跡は、関宮町別宮家野遺跡や日高町神鍋高原遺跡群のように、磨石や石皿等植物質食料の調理加工工具とされる石器が多く出土することを特徴としており、前田豊邦氏は、植生の垂直分布の検討を踏まえて、当地方における生業活動の主体が堅果類を中心とした植物質食料の獲得にあったことを強調している(前田1973・1985)。町内の遺跡は、すべて採集資料であるため、石器組成等の検討はなし得ないが、やはり高原地帯に立地することから、同様の傾向を有するものと考えられよう。

最後に、今回紹介した5遺跡を含め、町内の遺跡のほとんどが遺物の表面採集のみによって存在が知られ、多くが道路工事や開墾の際に発見されている。今後、保存対策と共に発掘調査を含めたより具体的な内容の把握が望まれる。また、これら周知の遺跡以外にも多くの遺跡の存在が予測され、早急に詳細な分布調査が必要と言えよう。

#### 参考文献

- 藤岡謙二郎 「古代日本の交通路III」大明堂  
1978年
- 兵庫県教育委員会 「兵庫県の中世城館・莊園  
遺跡」 1985年
- 石野博信編著 「縄文時代の兵庫」兵庫考古研  
究会 1979年
- 前田 豊 邦 「北近畿における縄文文化の研  
究」『古代学研究』第70号  
1973年
- 豊田 豊 邦 「兵庫県別宮家野遺跡」「探訪  
縄文の遺跡」西日本編 有斐閣  
1985年

## V. まとめ

### 調査の結果

**立地** 平野大墓は、一辺約5m、高さ約1mの方形基壇上に宝篋印塔を安置した構築物で、照来盆地を見下ろす丘陵の先端に単独で築かれていた。当地からは盆地が一望のもとに取められ、絶好の地が選ばれたと言える。

**遺構** 基壇はまず地山を壇状に整形して盛土を行い、盛土の周囲に3~5段の石積みを築いていた。盛土の流失は少なく、築造当初の高さは現状とそれ程差がないと考えられる。

基壇の東側では溝状の落ち込みを検出した。しかし遺物が出土しなかったため、落ち込みの形成時期は特定できず、平野大墓に伴うものかどうかは判断できない。仮に伴うとした場合、落ち込みは基壇の視覚的効果を高める狙いがあったと考えられるとともに、南側を正面と特定する要素となり得る。

基壇上の中央やや西寄りの地点から小石室を1基検出した。石室内には間仕切りによつて副室を設けるという構造がみられたが、内部から遺物は一切出土しなかった。

**遺物** 宝篋印塔は、笠と相輪が基壇上の台石上に立てられていた他、その周囲の表土中から残片が出土した。その範囲は基壇中央附近に限られており、宝篋印塔の各部分がそろっていた。このことは、当初は完全な姿で立っていたものが、ある時期に当地で破壊されたことを示している。宝篋印塔は基壇築造以後に他所から持ち運ばれてきた可能性もあり、基壇との時期が前後することも予想される。しかし一般的に、宝篋印塔や五輪塔が基壇・石室を伴う場合、塔の真下に石室を設ける例が多い。<sup>註1</sup> したがって、本例の基壇・石室・宝篋

印塔は当初から一体のものとして作られた蓋然性が強い。

今回の調査では宝篋印塔以外に遺物は一切出土していない。しかし基壇築造当初から塔が伴うと考えられるために、宝篋印塔から遺構の年代を導きだすことができる。また平野大墓に関するいくつかの文献史料が知られており、宝篋印塔と合わせて検討することによって、年代の推定を行いたい。

**宝篋印塔** 宝篋印塔は、笠がほぼ完存していた以外、相輪・塔身・基礎の各部分とも非常に欠損部分が多く、辛うじて全形を復原することができた。この塔は関西形式と呼ばれるもので、塔身の縁に輪郭をとらず、基礎には輪郭をとつて格狭間を刻み、反花座を持たないといった特徴がある。<sup>註2</sup> 基礎の三面に格狭間を刻み、一面を無地で残す手法は、但馬地方によくみられるものである。<sup>註3</sup>

宝篋印塔の残片には紀年銘などの形跡は認められず製作年代は判らないが、以下のような点から年代が推し測れる。まず基礎の格狭間は蓮華状の突起が無くなつて、南北朝以前のものより著しい退化形態を示している。また笠・基礎の高さと幅の比は、鎌倉時代末~南北朝の頃の例が1:1.2~1.5で偏平なのに対して、本例はほぼ1:1となっている。縦に対する横の張りが少ないため、全体的にめりはりのないプロポーションになっている。

こうした点は全体的に新しい様相を示しており、<sup>註4</sup> 地域は異なるが、加古川市平荘町所在の兵庫県指定文化財、文安4(1447)年銘宝篋印塔と比較しても形態差は明らかである。<sup>註5</sup>

また隅飾りの外傾度は弱く江戸時代まで下

る特徴はみられない。<sup>註6</sup>したがって、宝篋印塔の年代は室町時代後半でも16世紀を前後する時期とみて差し支えない。

**文献・伝承** 現在知られているところで、平野大墓の名がみえる最古の文献は、江戸時代中期以降に著された『二方考』<sup>註7</sup>である。その中の桐岡村の条に「平野大墓 当村の東にあり（中略）高野山西明院の記に永禄十（1567）年十月十日淨全大禪門中村和泉守とあり（中略）北村名田の書に曰く、滝の谷より南は北村兵庫介領、是より北は中村右京の進領とあり（以下略）」と記されている。ここでは平野大墓を紹介するとともに、そこに祀られた人物と淨全大禪門中村和泉守・中村右京進を、同一人物あるいは同一氏族とする表し方がなされている。

中村和泉守については、明治39（1906）年刊行の『七美郡誌稿』<sup>註8</sup>の中に、中村氏の累代の名前として数回登場している。

次に、大正4（1915）年発行の『美方郡誌』<sup>註9</sup>によれば、照来村の古碑及伝説として『二方考』とほぼ同様の記述の他に「一、古墳 桐岡村の東北字平野ニアリ、碑石長六尺幅四尺淨全大禪定門トアリ」と書かれていて現地に銘文をもつ石碑があったことになっている。

しかし調査の際にはそれに該当する遺物は得られず、宝篋印塔の在り方から推測すると、別に石碑があったとは考え難い。若干大きさが異なっているものの、宝篋印塔自身がその石碑であった可能性も考えられるが、出土した破片には銘文は認められなかった。

上に紹介した文献は、最も古いものでも江戸時代中期以降のもので、記述内容の年代とは200年以上の時間差があるため、史料としての使用には躊躇せざるを得ない。

しかし、文献に表れる年代は16世紀中頃を

中心としており、宝篋印塔が示す年代と基本的に矛盾するものではない。

（引用文中の西暦・句読点は、筆者註）

### 平野大墓の性格

平野大墓は照来盆地に南面する好地にあり、石積み・石室を備えた基壇上に、宝篋印塔を立てた構築物であった。

宝篋印塔・五輪塔などは鎌倉時代中期以降、全国各地で納骨場所の墓標、若しくは追善供養の塔婆として盛んに建立されるようになった。例えば宝篋印塔の一部に穿たれた納入孔に火葬骨が納められた例、あるいは五輪塔の下に設けられた石室内から骨蔵器が出土した例<sup>註10</sup>などは、墓標であることが歴然である。また宝篋印塔に刻まれた銘文で、追善供養のためであることがはっきりする場合もある。だがそのどちらの目的で立てられたものかは、それが明確に捉えられる具体的な遺物・金石文・文献・施設などが伴わない限り、その性格を求めるることは簡単ではない。

平野大墓においては、その性格を明示できるような遺物が出土しなかつたため、宝篋印塔が墓標であるか、供養塔であるかの判断は現時点では下せない。また平野大墓に祀られた人物の時代的・地域的な背景・性格についても今回は言及できなかった。同様な調査例の積み重ねによる解明を今後の課題としたい。



多子から平野大墓を望む

以上、昭和61年7月に実施した平野大墓の調査結果を述べてまとめとした。調査の遂行及び本小冊子の刊行にあたり、地元をはじめ多くの方々の参加、協力を得た。特に調査の委託者である兵庫県浜坂土木事務所と、地元の温泉町教育委員会には全期間を通じて種々便宜を計っていただき、ひとかたならぬお世話をうけた。また温泉町史編纂委員会・温泉町文化財審議委員会の委員の方々には貴重な御教示を賜った。さらに赤坂利明・中村頼信の両氏には発掘調査に対して快い御諒解をいただいた。謹んで謝辞を述べるものである。

註1. 横浜市金沢区極楽寺背後谷所在五輪塔赤星  
(1967)

註2. 川勝 (1936)

註3.\* 城崎郡城崎町温泉寺所在塔、養父郡養父町  
稻津所在塔、同 畑所在塔、豊岡市佐野所在塔  
などが知られる。川勝 (19 )

註4. 川勝 (1957)

註5. 兵庫県教育委員会 (1975)

註6. 川勝 (1957)

註7. 旧二方郡の地誌。宝曆元年福著の『但馬考』  
を参考にしたとされている。

註8. 旧七美郡の地誌。八木玄蕃編。

註9. 美方郡の地誌。美方郡史編纂同盟会編集發  
行。

註10. 赤星 (1967) 他、多数知られる。

#### (参考文献)

- 川勝政太郎 「宝篋印塔に於ける関西形式・関東形式」『考古学雑誌26-5』1936年  
「石塔婆を中心とする日本石材工芸史の研究」『日本石材工芸史』総芸社 1957年
- 川勝政太郎 「但馬地方の中心飾付格狭間をもつ  
宝篋印塔」『史迹と美術406』  
19 年
- 赤星直忠 「石造墳墓と矢倉」『日本の考古学  
VII』河出書房新社 1967年
- 兵庫県教育委員会 『昭和49年度指定兵庫県文化  
財調査報告書』 1975年
- 日野一郎 「宝篋印塔」『新版考古学講座 7』  
雄山閣 1979年
- 日野一郎 「石塔」『新版仏教考古学講座 3』  
雄山閣 1984年
- 坂詰秀一・森 郁夫編『日本歴史考古学を学ぶ  
(中)』有斐閣送書 1986年



調査参加者

# 平野大墓

—美方郡温泉町所在宝篋印塔の発掘調査—

1987年1月

編集・発行 兵庫県教育委員会  
印 刷 株式会社精文舎